

コーパスから見た中国人日本語学習者の 格助詞に関する問題点について

杉村 泰

1. はじめに

本稿は中国語を母語とする日本語学習者（以下「学習者」）の会話データに見られる格助詞に関する問題点について論じたものである。本稿で扱う会話データは中国の魯東大学の日本語学科で日本語を学ぶ学部生を対象に収集したものである。

今回収集したデータを見る限り、学習者の誤用は有対動詞の自動詞形と他動詞形を間違えるという形態論的なものよりも、「日本語が（ を ）¹⁾勉強します」、「携帯電話が（ を ）落としました」、「財布が（ を ）盗られました」、「友達が（ に ）会いました」、「日本の会社を（ に ）入社した」のように格助詞の選択による誤用が多かった。なかでも文法的格助詞といわれる「が」、「を」、「に」において、学習者は「に」を使うべきときに「を」を使い、「を」を使うべきときに「が」を使う誤用が多いという傾向が見られた。

「雪を（ が ）降った」や「黄山を（ に ）登るつもりです」のように「が」や「に」を使うべきときに「を」を使う誤用であれば、「降る」や「登る」は中国語では“下（雨）”、“登（山）”のように他動詞を使うため、母語による負の転移が働いて「を」が使われるのである」と説明することが可能である。しかし、実際にはその逆の誤用もあり、それらの誤用の原因を説明する必要がある。

また、本データからは、「情報を手に入れる（ が 手に入る ）」、「大きな変化を起こした（ が 起こった ）」、「成績がぐんと上げた（ 上がった ）」、「負担を軽減される（ が 軽減する ）」のように、日本語で自動詞形の方が自然な場合に他動詞形が使われる例が多く見られた。さらに、自動詞形の「感動する」が使われるべきところに受身形の「感動される」や使役形の「感動させる」が使わ

れる例も見られた。本稿はこれらの現象について若干の記述と考察を行うものである。

2. コーパスの概要

本稿で利用する会話データは、科学研究費補助金（基盤研究(C)）「中国語話者のための日本語教育文法の開発と学習者中間言語コーパスの構築」（課題番号19520451、代表者：杉村泰、分担者：張麟声）によって作成された「魯東大学会話コーパス」である。また、同研究費では「華東政法大学作文コーパス」も作成している。これについても3節で少し取り上げるため、以下にこの2つのコーパスの概要を示しておく。

1. 魯東大学会話コーパス

- ・魯東大学日本語学科の日本人教師1人と中国人学生延べ405人の日本語による会話
- ・収集データ：
 - 2006年6-7月（1年生59人、2年生28人、3年生20人、4年生27人）
 - 2007年6-7月（1年生30人、2年生55人、3年生26人）
 - 2007年12月（2年生56人、3年生50人、4年生54人）

2. 華東政法大学作文コーパス

- ・華東政法大学日本語学科の一学期間の2年生の日本語の作文
 - 作文のテーマは「夏休みの思い出」、「クラスメート」、「アルバイト」、「英語を大学の必修にすべきか」、「心を打たれたこと」、「親子とろば」など
- ・収集データ：
 - 2006年1学期（2年生20人）
 - 2007年1学期（2年生21人）

魯東大学会話コーパスは、従来の学習者中間言語コーパスにはない次のような特徴がある。

中国国内に在住する現役の日本語学習者が対象である

被験者は同じ大学の学生であるため、教材やカリキュラムなどの学習環境がほぼそろっている

インタビュアーが1人に固定されている

被験者数が延べ405人と多い

横断的研究にも縦断的研究にも使える

(被験者の学年別人数は1年生89人、2年生139人、3年生96人、4年生81人である。このうち1年生から3年生までの3年間収録した人は47人、2年生から4年生までの3年間収録した人は26人いる)

本データは公開を前提としており、関係者にはどのデータが誰の発話なのか分かるため、あえて日本語のレベル分けはしていない。むしろ同一の学年ごとにファイルしてある点に特徴がある

(会話のレベルが知りたい場合は、公開したデータを聞いて自分で判断することができる)

音声データと文字化資料は2010年4月に杉村泰ホームページ内で一般公開(無料)する予定である。(華東政法大学作文コーパスも同様)

杉村泰 HP の URL <http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/~sugimura/>

次に魯東大学会話コーパスの文字起こしの例を示しておく。これは文法研究のためのコーパスなので、細かい補助記号は施しておらず、読みやすいように漢字仮名混じり表記にしてある。ターンの位置も直感的に区切ってある。もし、音声や会話研究などで細かな記述が必要な場合は、公開する音声データを聞きながら必要に応じて修正することが可能である。

(文字起こしの例)

T は Teacher、S は Student の略。 はい など に挟まれた表現は聞き手のあいづち等を示す。

T : では、もうそろそろ一年生も終わりですが、あなたの学生生活はどうですか。

S : 面白いです。大学は暇なとき はい 沢山あります。 はい 私はいつも図書館へ行きます。 うん 図書館は本や雑誌や、雑誌など、雑誌などがたくさんあります。 はい それで私いつも行きます。

T : そうですか。 はい はい、では、今度の夏休みはふるさとに帰るつもりですか。

S : はい、 はい 私はふるさとには懐かしい、とても懐かしいです。 そうです

ね 私のふるさととは遠いです。 はい それで、とても懐かしい。 そうですね この夏休みは、 はい 私は、私は山、山をのぼ、登ります。 そうですか 登るつもりです。 はい 友達、友達、友達に会い、会います。

なお、収集したデータの文字起こしは現時点でまだ完全に終わっていないため、以下では、魯東大学会話コーパスの 2007 年 6-7 月のデータ（以下「会話データ」）のみを対象に論じることにする。

3. 動詞の自他の誤用

本稿の会話データにおいて、「開ける - 開く」、「冷やす - 冷える」のように自他の形態的な対応がある有対動詞の誤用は、例(1)～(5)のように全部で 5 例出現した。1 データあたり短くても 2 分、長いものは 9 分を超える録音時間で 111 人分のデータを収集したにもかかわらず、5 例しか出なかったのはいかにも少ない気がする。これはたまたま話題の中で有対動詞が使われなかったことも原因であると思われる。²⁾

- (1) 私は、もう、多分、自分の夢、自分の夢は実現する時に、んー、頑張って続いて（続けて）います。（2 年生）
- (2) （泥棒に財布を盗られて）彼は、20、20 元だけ残しました（残っていました）。（3 年生）
- (3) ほかの町に生んで、生んだ、生んだ、生んだ（生まれた）学生と私の[普通話]はあのう良くないです。（2 年生）
- (4) 最初の頃は、まずは研究室で研究して、あのう、あんまり口が開けなかった（開けなかった、開けられなかった）んですけど、（3 年生）
- (5) もし、大連で、仕事が、見つけなかったら（見つからなかったら、見つけれなかったら）煙台、煙台で仕事をしたい。（3 年生）

さて、この 5 例を見る限り、他動詞を使った方がいいときに自動詞を使っているのは例(1)の 1 例のみで、残りの 4 例は全て自動詞を使った方がいいときに他動詞を使った例であることが分かる。このうち、例(3)は話し手が子供を生んだという場面ではないためヲ格の存在は想定しにくい。そのため、構文としては「～ガ～する」という自動詞として使われたものであり、有対動詞の自他の

選択を間違えたものであると考えられる。

また、例(4)と例(5)は「開ける」,「見つける」という他動詞が使われているにも関わらず、対象はヲ格ではなく「口が(開ける)」,「仕事(見つける)」のようにガ格で表示されている。そのため、話し手は構文としては「～ガ～する」という自動詞構文を念頭に置きながらも動詞の自他の選択を誤って他動詞形を使ってしまったことが推察される。しかし、さらに考えると、例(4)と例(5)は自動詞形の「開く」,「見つかる」のみでなく可能形の「開けられる」,「見つけられる」を使うこともできる。そのため、この「開く」,「見つかる」は可能の意味を帯びており、張威(1998)のいう結果可能表現であると考えられる。このことから、例(4)と例(5)は単なる自他の誤用ではなく、可能表現の誤用であると考えることができる。張威(1998)の言うように日本語では自動詞で可能の意味を表すことがあるが、学習者はそのような自動詞を使いこなせずに誤用を起こした可能性があると考えられる。

また、会話データからは例(6)のように自動詞の「感動する」を使うべきところに受身形の「感動される」を使った例が1例出現した。

- (6) 先生がゆたゆたした歩い方を見ると、いつも感動されました(感動しました) (2年生)

この場合、たまたまこの誤用が現れたにすぎないとも考えられる。しかし、例(7)～(9)のように華東政法大学作文コーパスからも「感動する」を使うべきところに受身形の「感動される」が使われた例が見られる。これは中国語では日本語の「感動する」にあたる言葉を“被感动”のように受身形で言うため、その負の転移が行われたためであると考えられる。(例(7)～例(14)は華東政法大学作文コーパスの例である)

- (7) 外はずいぶん寒くて、父は私にのんで寒い風の中を歩いている姿を見ると、とても感動された(感動した)。
- (8) このドラマは悲劇ですが、ほんとに感動されました(感動しました)。
- (9) 彼女はとても薄着して、疲れる顔を見られた。私は昨夜のことを思い出して、とても感動られて(感動して) 泣くなったところだ。

また、例(10)は「感動する」を使うべきところに使役形の「感動させる」を使った例である。この場合、「思わず」という副詞の存在からも分かるように自発的な意味を伴うため、日本語では自動詞の「感動する」を使うのが自然である。一方、例(11)のように主語に使役の主（「この返事」）が来ると使役形の「感動させる」も多少使えるようになる。しかし、この場合も日本語では「私はこの返事に感動した」のように自動詞形を使う方が自然である。同様に、例(12)も使役受身形の「感動させられる」でも間違いではないが、日本語では自動詞形の「感動する」を使った方が自然である。

- (10) このプレゼントには深い感情を含めて、このことを思い出すと、思わず感動させた（感動した）。
- (11) この返事こそ私を感動させた（私はこの返事に感動した）。
- (12) 彼女の勇氣と品質に非常に感動させられる（感動した）。

一方、例(13)と例(14)は使役形や使役受身形が適切に使われている例である。このうちの例(13)は話し手が他者に感動を与える場面である。このような場合には「感動させる」という使役形を使うことができる。これに対し、上の例(10)や例(11)のように話し手自身が他者から感動を受ける場合には「感動する」という自動詞形を使った方が馴染みやすい。また、例(14)は多少の不自然さは残るものの、例(12)に比べてかなり自然な日本語になっている。これは例(12)の主語が無情物（「彼女の勇氣と品質」）なのに対し、例(14)の主語は有情物（「リーダのテツさん」）であるためであると考えられる。このことから、日本語において人に感動を与える場合の使役の主は有情物である人間がふさわしいことが分かる。

- (13) 感動瞬間を覚えて、自分も他人を感動させることをもっとすると、世界はとも思う。
- (14) それだけでなくリーダのテツさんもがんばり屋で、バンドのことをいつも命にしている、本当に感動させられる。

なお、中国語を母語とする日本語学習者が「感動する」を「感動される」と表現してしまう現象については、庵（2008）にも論じられている。庵（2008）

は中国語母語話者の漢語サ変動詞の自他の誤用について調査し、母語話者と初級・中級・上級・超級学習者に以下のような文法性判断テストを行った。その結果、母語話者が「感動する」を選択する場面において、学習者は「感動される」を選択しやすいことを指摘している。このことは本稿の会話データからも裏付けることができる。

- (38) 彼女の踊りを見て、強く(感動しました 感動されました 感動させました)
(例文番号(38)は庵 2008 による)

表1 「感動される」と回答した人の割合(庵 2008 より)

	母語話者	初 級	中 級	上 級	超 級
(38) 感動される	0 ~ 30%	30 ~ 50%	30 ~ 50%	30 ~ 50%	50 ~ 80%

以上、会話データから出現した少数の誤用例を観察した結果にすぎないが、学習者の自他動詞の誤用は、単なる形態的な自他の選択の誤りによるものだけでなく、日本語の自動詞構文が可能表現や受身表現(あるいは使役表現)と混同しやすいことも重要な原因の一つとなっていることが窺われる。

4. 格助詞の誤用

本稿の会話データを見る限り、「開ける - 開く」、「冷やす - 冷える」のような自他の誤用は僅かしか出現しなかった。これに対し、格助詞の誤用は非常に多く出現した。会話データは作文データと違って会話が途中で切れたり、言い直したり、助詞の脱落が起こったりすることが頻繁にある。そのため、正確に正用数と誤用数を数え上げることは困難である。しかし、いわゆる文法的格助詞とされる「が」、「に」、「を」の誤用についてざっと調べただけでも、学習者は「に」を使うべきときに「を」を使い、「を」を使うべきときに「が」を使う誤用が多いことが分かる。

- *が(を)(23 例)
- *が(に)(7 例)
- *を(が)(6 例)
- *を(に)(19 例)
- *に(を)(3 例)

*に (が) (0 例)

一般に中国語は“下雪”(「雪が降る」)や“见朋友”(「友達に会う」)のように日本語で自動詞が使われる場合に他動詞を取ることがある。そのため、もし学習者の誤用が単に中国語からの負の転移によって起きるだけであれば、「に」を使うべきときに「を」を使う誤用だけでなく、「が」を使うべきときに「を」を使う誤用も多く出現するはずである。しかし、本稿の会話データからは「を」を使うべきときに「が」を使う誤用が多く出現している。このようなことは従来あまり指摘されていなかったことである。したがって、その原因を考えることが重要な課題となる。以下、それぞれの誤用例を順に示しておく。(類似した例は適宜省略してある)

*が (を) (23 例)

- (15) いろいろな映画が (を) 見ました。例えばスリラー映画が (を) 見ます。(1 年生)
- (16) 私は、以前は、このにがいて、あ、にがいるの新聞が (を) 見ました。(2 年生)
- (17) んー、私は以前に高、高校時代のとき、んーいつもいつも勉強して、かのもととは接することができない、でも大学に入って、入ってから、いろいろなものが (を) 見て、いろいろなことが (を) やって、自分の性格はだんだん変わっています。(2 年生)
- (18) 高校のとき、いろいろな科目が (を) 習います。はい 大学に主な科目が (を) 習いますので、自分はとても嬉しいです。(1 年生)
- (19) 私は今年は日本語が (を) 勉強します。はい バスケットボールが (を) 勉強します。コンピューターが二回、二回、二回のテストが (を) 受け、受けます。(1 年生)
- (20) その上に、んー私は、んー韓国語が (を) 勉強している。(2 年生)
- (21) 簡単な単語が (を) 覚え、覚えることができます。(2 年生)
- (22) あ、なつみや、夏休みで勉強、あー勉強することが (を) 続けています。(2 年生)
- (23) 土川先生は、犬の肉が (を) 食べませんでした。(2 年生)
- (24) 今、成績が (を) 知りませんよ。(2 年生)
- (25) 将来私は、勉強、日本語を使う仕事をすることが (を) 望む、望み、望み

ますよ。(2年生)

- (26) 一年生の時、二年生のはじめの時、はい いろいろなことが(を) 考えると書くことができませんでしたね。授業に受けると、いろいろなことが(を) 書くにできます。(2年生)
- (27) 男の、あの、服は、割り、割引が(を) します。しています。(中略) 割引がありますので、うーん たぶんその時、買ったほうがいいです。(2年生)
- (28) 先生、先生は、私、私に、二年生のかん、感想、かん、感想が(を) 質問しま、しました。(2年生)
- (29) 二組の、学生は、ある人が携帯電話が(を) あー落としました。例えば、さん、さん、あの二人の人は携帯電話を落としました。(3年生)
- (30) 彼はバスでの、乗った時、財布が(を) 泥棒に、泥棒に盗られました。(3年生)

*が(に)(7例)

- (31) いろいろ友達が(に) 会いました。(中略) それに、井上先生が(に) 会いて、とても幸いです。(1年生)
- (32) 残念ながら、一級テストが(に) 合格しなかったです。(3年生)
- (33) いつもいろいろ間違ったことが(に) 気が付きました。(2年生)

*を(が)(6例)〔中国語では「V + S/O」となる〕

- (34) 雪を、雪を(が) 降ったとき、一緒に雪合戦をしました。(1年生)(“下雪”)
- (35) 友達を、友達を(が) できます、できます。(1年生)(“交朋友”)
- (36) 日本語の、日本語の勉強の中でいろいろの問題を(が) ありました。(2年生)(“有很多问题”)
- (37) それから作文、特に一級テスト、はい いろいろな困難を(が) あります。(2年生)(“有很多困难”)
- (38) 私は、本、本来、本来私は、私は歴史、歴史を(が) 歴史が好きです。(2年生)(“喜欢历史”)
- (39) 「だから、お金を(が) ほしい」と言いました。(3年生)(“要钱”)

*を(に)(19例)[中国語では「V + O」となるものが多い]

- (40) でも、私はたくさん友達、友達を、友達を、たくさんの友達を(に)会いました。(1年生)(“見朋友”)
- (41) 日本語の能力、1級能力試験を(に)合格すればいい。(2年生)(“一级考试能合格”)
- (42) この夏休みは、はい 私は、私は山、山を(に)のぼ、登ります。(1年生)(“登山”)
- (43) 土曜日と日曜日は、私はバスケットボールを(に)行きたいですが、(1年生)(“想去打篮球”)
- (44) 大学の外国語、外国語大学を(に)行きたいです。(2年生)(“想上外国语大学”)
- (45) あ、以前は、んー、船を(に)乗ります。(2年生)(“坐船”)
- (46) いろいろな活動を(に)参加しようと思います。(1年生)(“要参加活动”)
- (47) 私は日本の会社を入、日本、日本の会社を(に)入社した。(2年生)(“进日本公司”)
- (48) 私は日本語を、を専攻として、日本語の翻訳を(に)なりたいです。(2年生)(“想当日语翻译”)
- (49) もし、東京へ行ったら、そこで、東京、東京で、ある大学の先生にな、なることができから、あ、そこで、あ、日本人を(に) 日本人に中国語を教えたいです。(3年生)(“想教中文给日本人/想教给日本人中文”)

*に(を)(3例)

- (50) 私の目標は、例え、私の日本語の勉強に(を)一生懸命にします。わ、去年、去年、私の、私の日本語の成績は悪かったです。はい それで、来年、私、私は日本語を一生に、一生勉、勉、日本語を勉強しなければなりません。(1年生)
- (51) 母に(を)てつだ、手伝い、て、手伝います。(2年生)
- (52) 授業に(を)受けると、いろいろなことが書くにできます。(2年生)

5. 「を」を使うべきときに「が」が現れる例

本稿の会話データを見ると、「映画が(を)見る」、「韓国語が(を)勉強する」、「犬の肉が(を)食べる」のように「を」を使うべきときに「が」が

使われる誤用が多いことに気付く。これらの表現は中国語では“看电影”、“学习韩语”、“吃狗肉”のように他動詞で表されるため、「を」が使われても良さそうに思われる。³⁾ 全体の中での出現数はわずかであるため、⁴⁾ 単なるうっかりミスとして処理することも可能である。しかし、これらの誤用を見ていくと、必ずしも単なるミスとは考えにくいものもある。本稿ではそのような誤用の原因について考えてみたい。

次の例(54)は先の例(18)を含む会話例である。この会話例は正用・誤用を含めて全体的に「～が～だ/する」という表現が多く使われていることに気付く。

- (54) 大学に入って寮生活を始めました。それに、いろいろ友達が(に)会いました。いろいろ仲よい友達ができました。それは、私はとてもうれしいです。それに、それに、井上先生に会えて、とても幸いです。私は日本語が大好きです。高校のとき、いろいろな科目が(を)習います。大学に主な科目が(を)習いますので、自分はとてもうれしいです。(1年生)

同様に次の例(55)は先の例(19)を含む会話例である。これも全体的に「～が～だ/する」という表現が多く使われている。

- (55) 日本語が(を)初め、初め、初めて勉強します、日本語が難しいと思います。そうです。先生が、でも、先生が親切です。生活、生活が新しいです。私は初めて一人で寮に住んでいます。はい、でも、私のうちは近いです。私のふるさととは[? 聞き取り不能]です。でも懐かしいがありますね。それから、私は、それから、私はがんばれ。大学生にとって、たくさんものを勉強します。私、私は、今年は、今年は日本語が(を)勉強します。バスケットボールが(を)勉強します。コンピュータが(を)二回、二回、二回のテストが(を)受けます。(1年)

このことから考えられるのは、話し手は頭の中でまず「私は～が～だ/する」という構文を思い浮かべ、「Nが」と言うってから適当な述語を探したため、「習う」、「勉強する」、「受ける」のように本来ヲ格を取る動詞の場合にもガ格を使ってしまったのではないかということである。実際、文字を見るだけでは分かりにくいですが、これらの文を耳で聞くと「Nが」と言うってから言葉を探すように

して述語「V」が現れることがよく分かる。すなわち、この場合に、学習者は「～は～が～だ/する」構文を基礎にして発話したために、「を」を使うべきときに「が」が現れたものと考えられる。

もう一つ考えられる可能性は、学習者はこれらの「が」を主題の「は」の意味で使っているのではないかということである。つまり、たとえば例(55)の最初の例は「日本語は初めて勉強します」と言いたかったのではないかということである。このことは、この録音を聞いた日本在住の複数の中国人大学院生(日本語学専攻)から指摘を受けた。⁵⁾ いずれにせよ、例(54)や例(55)のような「*が(を)」の誤用の原因については、現時点では仮説を提唱するにとどめておく。

一方、先の例(24)と例(25)は類義の述語が対象にガ格を取るため、それとの混同で「が」が現れたと考えることもできる。すなわち、例(24)は「知る」と同じ知識の取得を表す「分かる」が対象にガ格を取り、例(25)は「望む」と同じ希望を表す「～したい」が対象にガ格を取るため、それと一緒に「が」を使ってしまったのではないかと考えられる。さらに「知る」や「望む」は状態的な動詞なので、他動詞構文よりも自動詞構文が選択されやすいのではないかと考えられる。

(24) 今、成績が(を) 知りませんよ。(2 年生)

(25) 将来私は、勉強、日本語を使う仕事をすることが(を) 望む、望み、望みますよ。(2 年生)

また、例(26)は「書く」のあとに「できる」という可能を表す表現が現れている。「～することができる」という表現は対象にヲ格を取るが、可能を表す本動詞の「できる」は「私は～ができる」のように対象にガ格を取るため、学習者は誤って「が」を使ってしまったと考えられる。この場合も可能は状態的な意味を持つため自動詞構文が選択されやすいと考えられる。

(26) 一年生の時、二年生のはじめの時、 はい いろいろなことが(を) 考えると書くことができませんでした。授業に受けると、いろいろなことが(を) 書くにできます。(2 年生)

例(27)の場合は、話し手は後で「割引があります」と言っているのですが、もしかしたら格助詞の誤用ではなく「割引がします(あります)」という動詞の選択の誤用なのかもしれない。

- (27) 男の、あの、服は、割り、割引が(を) します。しています。(中略) 割引がありますので、うーん たぶんその時、買ったほうがいいです。(2年生)

次の例(29)の場合、話し手は後で「携帯電話を落としました」と言っているのですが、「落とす」は対象にヲ格を取るということを知らないわけではない。しかし、最初の部分で「携帯電話が」と「が」が現れているのは、話し手はまず頭の中で「携帯電話がどうなった」という自動詞構文を思い浮かべ、その後で「落とした」という述語を思いついて挿入したためであると考えられる。

- (29) 二組の、学生は、ある人が携帯電話が(を) あー落としました。例えば、さん、さん、あの二人の人は携帯電話を落としました。(3年生)

最後に例(30)の場合、一般に受身文は「対象が～される」のようにガ格が使われるため「が」が使われたと考えられる。この場合、「財布が泥棒に盗られた」と言っても必ずしも間違いではないが、ここでは「財布」よりも被害者である「彼」に焦点があるため、「彼」をガ格にして「彼は(が)財布を盗られた」と言った方が自然な日本語になる。

- (30) 彼はバスでの、乗った時、財布が(を) 泥棒に、泥棒に盗られました。(3年生)

以上、本会話データで学習者が「を」を使うべきときに「が」を使った例をいくつか見てきた。その結果、学習者の誤用にはいくつかの原因があり、場合によってはそれらが複合して影響していることが考えられる。このことはたまたま得られたデータから推測した仮説にすぎない。しかし、これらの例を見るだけでも、学習者が「*が(を)」という誤用を起こす原因は、母語である中国語からの負の転移によるばかりではなく、様々な要因により「～は～が～だ/

する」構文が想起されたことにも起因するのではないかと推察される。同様に「に」を使うべきときに「が」が使われた例も、学習者の頭の中にはまず「～は～が～だ/する」構文が想起され、その後に動詞が挿入されたために「に」ではなく「が」が出現したものと考えられる。

6. 「が」や「に」を使うべきときに「を」が現れる例

次に「が」や「に」を使うべきときに「を」が使われる例について論じる。これは張（2001）ですでに指摘されているように、中国語ではこれらの表現が他動詞で表されるためであると説明することができる。

張（2001）

*おれは猫のほうを（ が ）怖いんだ。（“我怕猫”）

「中国語の他動詞構文のイメージが強く働いているために、中国人学習者はたとえ正確に「怖い」や「うらやましい」などを形容詞の形として使うことができても、その前の格助詞はなんとなく「を」にしてしまうのです」(p.57)

先の例(34)～(49)の例を見ても中国語ではほぼ他動詞で表されていることに気付く。実際、日本在住の複数の中国人大学院生（日本語学専攻）に聞いたところ、みな直感的に中国語からの影響があると答えている。

7. 「を」を使うべきときに「に」が現れる例

最後に「を」を使うべきときに「に」が使われる例について論じる。この誤用は例(50)～(52)に示した「勉強に（ を ）一生懸命にする」、「母に（ を ）手伝う」、「授業に（ を ）受ける」の3例が出現した。これらはいずれも中国語では“努力学习”、“帮他的忙”、“上课”のように言い、日本語の「に」に相当する文法形式は出現しない。この場合、おそらく学習者は頭の中でまず「勉強に取り組む」、「母に手をさしのべる」、「授業に出る」のような二格構文のイメージを思い描き、その後で「する」、「手伝う」、「受ける」という動詞を思いついて述べたためにこのような表現が生じたのではないかと考えられる。

8. まとめ

以上のような現象を観察すると、母語である中国語の自他の影響によると考

えられるものと、それとは別の原因によると考えられるものとがあることが分かる。この点についてはまだ十分に研究がなされておらず、今後日中対照研究と誤用分析に基盤をおいた習得研究の必要性があると思われる。

なお、本稿で使用した魯東大学会話コーパスと華東政法大学作文コーパスは 2010 年 4 月に杉村泰ホームページ (<http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/~sugimura/>) 内で一般公開（無料）する予定である。

付記：本稿は平成 19-21 年度科学研究費補助金（基盤研究（C））（課題番号 19520451）による研究成果の一部である。

注

- 1) 「A (B)」は矢印の右側の表現が正用であることを示す。
- 2) 中石（2005）は K Y コーパスにおける自他の誤用を調査した結果、「各母語話者とも、初級では対のある自他動詞の誤用はなかったが、中級に入ると誤用が表れ、超級になっても英語母語話者、中国語母語話者の発話には誤用が見られた」（pp.24-25）と指摘している。ただし、次に示す表 2 を見ると、中級や上級で誤用が現れるといっても非常に少ない割合でしかないことが分かる。

表 2 対のある自動詞、他動詞の使用数と誤用数（中石 2005 より）

	初級（5 名）	中級（10 名）	上級（10 名）	超級（5 名）
中国語	0/18	10/251	14/322	1/126
韓国語	0/14	10/271	8/327	0/227
英 語	0/18	9/167	5/305	1/161

- 3) どの被験者も全体的には他動詞の対象を「を」で表示している。そのため、基本的に他動詞の対象が「を」で表示されることは理解されていると考えられる。
- 4) 本来であれば述語動詞の総出現数を明記すべきであるが、会話が途中で切れたり、言い直したり、助詞の脱落が起こったりすることが頻繁にあり、数えるのが困難であるためこのような曖昧な書き方になっている。しかし、1 データあたり短くても 2 分、長いものは 9 分を超える会話を 111 人分集めた資料の中でこれだけの数しか出現しないのは、学習者は使える表現しか使わないためであると考えられる。本稿

はあくまで誤用が起きる場合にどのような原因によるものなのかを考察するものであり、決してこのような動詞を使う場合に格助詞の誤用が起きやすいと主張しているわけではない。

- 5) このような場合によく「フォローアップ調査が大切である」と主張する人もいるが、「は」と「が」の違いをよく理解していない1年生になぜ「が」を用いたのかを聞いたところで明確な答は得られないと思われる。

参考文献

- 庵功雄 (2008) 「漢語サ変動詞の自他に関する一考察」『一橋大学留学生センター紀要』第11号, pp.47-63
- 張威 (1998) 『結果可能表現の研究』くろしお出版
- 張麟声 (2001) 『日本語教育のための誤用分析 - 中国語話者の母語干渉 20 例 - 』スリーエーネットイワーク
- 中石ゆうこ (2005) 「対のある自動詞・他動詞の第二言語習得研究 - 「つく - つける」、「きまる - きめる」、「かわる - かえる」の使用状況をもとに - 」『日本語教育』124号, pp.23-32